

## 奥野卓司教授退職記念号によせて

社会学部長 難 波 功 士

奥野卓司先生は、1978年3月に京都工芸繊維大学大学院修士課程を修了され、Institute of International Education 研究生（米国国務省国際交流計画による公費留学）などを経て、1982年4月に京都芸術短期大学（現京都造形芸術大学）に専任講師として着任され、1986年4月よりは同助教授を務められました。また、この間にイリノイ大学人類学部客員研究員・同客員准教授なども歴任し、1991年4月よりは甲南大学文学部社会学科助教授に就任され、1994年4月よりは教授を、また同大学院にて博士課程前期課程指導教授なども務められました。そして、1997年4月より関西学院大学社会学部教授に着任され、同大学院社会学研究科においても教鞭をとってこられました。2000年3月には京都工業繊維大学より博士（学術）の学位を授与され、2001年4月からは関西学院大学大学院社会学研究科にて、博士課程後期課程指導教授として後進を指導されてきました。

先生はもともと、生態学（エコロジー）や動物行動学（エソロジー）をご専攻でしたが、研究対象を人間の社会や文化へと広げていく中で、新たなメディア環境・メディア空間をフィールドとし、そこでの人々の行動のありようを解明していく「情報人類学」という新たなディシプリンを提唱されるなど、人文科学・社会科学・自然科学を横断する、ユニークな研究活動を展開してこられました。

幅広く、多くの著作をものされ、多岐にわたる活動を続けてこられた先生のお仕事は、安易な整理・要約を拒むものではありませんが、以下3点を、その主な特徴や功績としてあげることも可能でしょう。

まず一つ目は、一時のブームの後、顧みられることの少なかった情報社会論やメディア論を、新たなメディアの誕生やそれを使いこなす人々の登場をいち早く視野に入れ、それらの議論を再度活性化させた点です。『パソコン少年のコスモロジー』（筑摩書房、1990年）は、デジタルメディアの普及とその使い手である新世代の出現が、人々の行動や社会のあり方を大きく変えるであろうことを、もっとも早い段階で指摘した著作でした。現状を分析するだけでなく、そこに未来の予兆を見出し、よりよき社会を構想・提言しようとする姿勢は、先生の著作に一貫しています。

二つ目は、上述のような未来志向の一方で、先生は現在の日本発コンテンツを、日本の伝統文化と関連づけて多く論じてこられました。日本発のコンテンツが海外で注目を集める理由が、そのオリジナリティにあるとすれば、それは幾分なりとも日本ローカルな文化的土壌から生み出されているのではないかと。奥野先生は、ローカルに根ざす文化であるがゆえに、グローバルに支持されるというパラドクスを、ていねいに解きほぐしてこられました。京都の街中で生まれ育った先生ならではのお仕事といえるでしょう。しかし、それは単純な過去の賛美を意味しません。『江戸〈メディア表象〉論』（岩波書店、2014年）は、過去がつねに構築・再編され続けるものであることを指摘しています。

そして最後に挙げるべきは、社会により開かれた学識のあり方です。奥野先生は学外の役職も多く務められ、多様な業務に当たっておられますが、そこでの経験とご自身の研究とが、相互により円環をなしているように思われます。近年では、生物多様性の維持や持続可能な社会のあり方について、活発な研究ないし実践に力を注がれています。もちろん学内においても、情報メディア教育センター長や図書館長といった重責を担われ、そうした役務を通じても、ご自身の研究成果の還元尽くしてこられました。

以上、既存のアカデミズムの枠やディシプリンの壁をのりこえて、広範な研究・活動をされてきた先生の軌跡をたどってみました。その原点には、『ボクたちの生態学』（ダイヤモンド社、1973年）に描かれているように、既成の価値観が崩れていく中、さまざまな模索を続けた若き日の体験があるのでしょう

(この本は私にとっては、1960年代から70年代にかけての若者文化の転換や、カウンター・カルチャーの日本での受容・展開の過程を考える上での貴重な資料です)。

今後とも、奥野先生がいつまでもお元気で若々しく、自由な発想で新たな領域を切り開き続けられることを学部一同祈念しております。